

2020年6月29日

父の日を迎えて——「千里を駆け巡る志」父・民治への手紙から

副校長 竹山 幸男

6月も間もなく終わりに近づいています。京都も梅雨に入り、雨の日もあるのですが、今年は比較的晴れの日が多く続いています。湿度が高い中、気温もかなり上がり30度を超える日も出てきているので、熱中症にも気をつけてくださいね。先週の日曜日は父の日でした。その同じ日曜日、部分日食があり、京都ではあいにく曇っていて観察しにくかったのですが、同時に観察していた石垣島、波照間島はとても天気がよく、zoomを用いて太陽の変化と影の様子、そして周りが暗くなる様子を見ることができました。石垣島、波照間島の天文台の先生、学校の先生方からもいろいろなお話を聞くことができ、時間や場所を超えて、とても簡単にオンライン上でつながることができることを実際に体感することができました。先週土曜日の学びプロジェクトでは、世界の学校のランチを見に行こう、ということで、ニュージーランド、マルタ、フィンランドの学校のランチ、生活、いろいろな食べ物を見て学ぶことができました。時間や場所を超えることは、日本だけでなく世界の人たちともつながることも、今では簡単にできるようになりました。特に、4月に入学した中学1年生の皆さんも、オンラインの学びの中でもzoomを使い慣れているので、途中でチャットしながら質問をする姿を見て、大人よりいろいろな新しい状況に対応していくので、とても頼もしく思ったところです。皆さんのお住まいの地域で見られた日食は、どのようなものでしたでしょうか。また、オンラインでの学びプロジェクト、オンライン留学などの紹介もしていますので、興味あるものがあれば、ぜひ参加してみてください。



同学びプロジェクト「『部分日食』観察講座オンライン」
日食の変化をリアルタイムで沖縄から中継してもらった画面を
時間経過の順に、左上から右下へならべたもの。

今週、6月第5週目については、現在の感染症の感染状況については、関西、東海地方も含めて比較的落ち着いた状況が見られますので、週5日の登校を引き続き行っています。引き続き、通勤通学時間帯の感染リスクを避けるために、時差登校、下校についても継続いたします。翌週（7月6日～）については、感染症の感染状況が落ち着いた状況であればそれを継続し、もし状況が変わり、感染拡大傾向が生じていると学校として判断した場合には、学年ごとの隔日登校日を設定する予定です。（7月6日以降の予定につきましては、7月3日の学校HPで発表予定です）なお、7月中の予定の詳細については、学校のホームページをご覧ください。体調面、その他さまざまな事情で登校することができなかった生徒の皆さんもおられますが、6月の第5週も、「学習ポータルサイト」を用いた学びを基本に据えて、各教科の学びの内容、生徒の皆さんとのやり取りを継続

いたしますので、これまでに引き続き、しっかりと取り組んでいただきますようお願いいたします。特に、今年の1年生の皆さんは、100年に一度というような感染症の状況がありますので、まだまだいろいろと学校の様子がわからないことも多いかと思います。生徒の皆さんからの質問、相談については、教科の内容であれば教科の先生へ、学校についての相談であれば担任の先生へご遠慮なくご連絡ください。これまでもお知らせしている通り、これまでの4か月間と直近1週間の日本の状況と対応、海外の状況と対応、そして、医療関係の専門家の方々の提言など、さまざまな状況を総合的に考慮すると、感染状況が比較的落ち着いているとはいえ、感染症の今後の状況については、まだまだ予測が難しい状況が続くものと思われまます。同志社中学校では、中学生という発達段階での健康面への配慮や、京阪神はじめ近畿圏、ならびに愛知、岐阜などからも新幹線通学で通っておられる生徒の皆さんも多くおられことも考慮しつつ、生徒のいのちと健康を守ることを最優先にしながら、学校としての対応を慎重に検討しております。今後の感染状況の推移（緊急事態宣言解除による緩み、第2波への警戒など）にもよりますが、最新の状況を反映したかたちで週ごとに登校日の設定を考えていきたいと考えておりますので、ご理解と御協力のほどどうぞよろしくお願いいたします。

第12週目（6月29日～7月3日）は、これまでの取り組みに引き続き、動画を用いた課題の提示、提出、メールでの質問を継続しますので、生徒の皆さんも取り組みを続けてください。6月29日からの1週間についても、さまざまな事情で登校ができない生徒の皆さんを対象に、教科によってはzoomを用いての学び面談がありますので、予定については、教務部から案内の面談予定表をご覧ください。なお、生徒の皆さんに夏休みに取り組んでいただく自由研究に向けたオリエンテーション、準備も今進められています。1年生の皆さんは、取り組もうと考えている自由研究のテーマについての登録をほぼ終わられました。実際の取り組みに向けて、さらにテーマの問いを深め、どんなかたちで取り組みまとめるかについて、入学時にお渡しした「きささげ」や5月30日の学習ポータルサイトを見ながら、夏休みの取り組みに向けてイメージをふくらませておいてください。図書館の先生から紹介された本についても、見つからなかったりわからなかったりする場合には、引き続き学校でまたメールで図書館の先生にお尋ねください。2・3年生に皆さんの登録をすませた今後の予定については、7月に入ってから教務部の担当の先生から連絡がありますので、しばらくお待ちください。

日ごろの担任の先生からの連絡、面談については、その都度レスポンス（応答）していただき、皆さんの日頃の様子などを知らせてください。健康観察については、引き続き保健室の先生あてご提出ください。特に、毎日の登校が続いていますので、健康観察をしっかりとしていただき連絡をよろしくお願いいたします。第12週目の詳細については、別途ホームページ上の教務部より「第12週目のお知らせ」または学習ポータルサイト上の生徒ページ・生徒伝達に「第12週目のお知らせ」をご覧ください。機器（iPad）やアプリの使い方で不明な点があれば、「学習ポータルサイト」（→ [生徒ページ] → [在宅学習サポート]）にアドバイスや解決方法を掲載しています。また、「2020年度版ICT活用・情報倫理ハンドブック」（同志社中学校）の1～28ページ

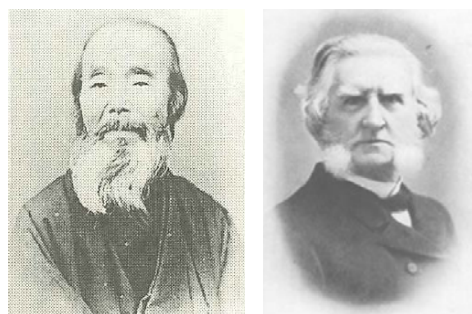
に、課題提出で用いているロイロノート、zoomの利用方法を含め、iPadでの学習に際してのさまざまな活用ガイドが掲載されていますので、取り組みの際には、引き続き参照するようにしてください。

さて、先週の日曜日（6月第3日曜日）は、「父の日」でした。5月の第2日曜日の「母の日」のことは、先月のお話で取りあげた通り、アメリカ発祥でその起源がキリスト教会と関係の深いものでした。

「父の日」もまたアメリカの教会で始まったもので、今年でちょうど110年になるそうです。1908年、ウエストバージニア州の教会で「母の日」を祝う礼拝が初めて行われ、翌1909年西部のワシントン州スポケーンの教会でも「母の日」礼拝が行われていました。その影響を受けて、「父の日」の礼拝を持ってほしい、との呼びかけが起こり、翌年1910年6月19日「父の日」を記念する礼拝がスタートしました。呼びかけを行ったのは、ソノラ・スマート・ドッドさん。ソノラさんの母は、6人目の子どもの出産のときに亡くなられ、父ウイリアムさんが6人の子どもを育てることになりました。長女であったソノラさん



も一緒に弟、妹を育てたので、父の苦労をねぎらうという意味を込めて、父の誕生日に近い6月に行なわれた「父の日」礼拝の日曜日：6月第3日曜日を「父の日」として記念することになりました。アメリカで公式の記念日として制定されたのは、「母の日」の制定（1914年）からはるかに遅く、1972年のことでした。日本で広く紹介され始めたのは、1980年代のことです。ヨーロッパのイタリアやスペインでは、イエス・キリストの父ヨセフを記念して、3月19日が、ドイツではイエス・キリストの昇天する昇天日（イースターから40日目の木曜日）が「父の日」とされています。（「『父の日』の起源と由来、教会で生まれ今年110年」：2020年6月19日、クリスチャントゥデイ参照）



左) 新島民治 右) A.ハーディー

さて、「父の日」といえば、同志社の創立者・新島先生には、実の父であった民治とアメリカの父であるハーディーの2人のお父さんがおられました。今日は、新島先生の父・民治あての手紙などを見ながら、まず父・民治に伝えたかったことを考えてみたいと思います。

その前に、新島先生の父・民治はどんな人物だったのか、少し見てみましょう。

新島家は、安中藩の下級武士の家で、江戸屋敷で藩主（板倉家）に仕えていました。新島先生は、4姉妹の後の待望の男の子であり、弟双六が4年後生まれるのですが、一家の期待をこめて「七五三太」（しめた）と名付けられたことは皆さんもご存じのことと思います。父・民治は、

記録を作成し、書類を保管することが仕事であったようです。書道塾も開いていて、生徒たちからは「えびす」と呼ばれるくらい、おだやかな性格だったようです。一方、足軽などのまとめ役の祖父の弁治が、新島先生を特にかわいがり、母親の言うことを聞かなかったりした時には、厳しく叱ったりしたようです。性格は、父の民治と正反対で、社交的で町人とも関係があり、いろいろなことを頼まれればそれを引き受けていたようで人望も厚かったそうです。孫の七五三太が生まれたときには、まだ58歳で、新島家の家長として家族に影響力を持っていました。ですので、新島先生の何でもチャレンジしていく社交的な性格は、お父さんというよりおじいさん譲りではないか、と指摘されているところです。（和田洋一「新島襄」岩波現代文庫 参照）

今月は、新島先生がフィリップス・アカデミーに留学していたときの手紙を見ながら、先生の留學生活の様子を皆さんと学んできましたが、ちょうどフィリップス・アカデミーを修了する少し前に父・民治宛に出した長文の手紙を見てみたいと思います。（1867年3月29日「現代語で読む新島襄70～78ページ」）

この手紙では、まず、新島先生がアメリカに来るまでの経過、ハーディーさんとの出会いを記しています。そして「**ハーディーが私を世話してくださるのは、「天上独一真神」への信仰からです。…全く対価を望まず、手厚く取り扱い、その上5年でも10年でも私のために学費を出そう、と前から約束してくださっていますので、どうぞご安心ください。**」と伝えています。新島先生は、キリスト教の神様のことを日本での神様の理解との違いがわかるように「天上独一真神」と表現しています。日本では、八百万の神、目に見えるものが神様であるのに対して、アメリカでは、天におられる目に見えない存在が神様であるという理解が大きな違いとしてあります。聖書を通して、新島先生は、とても新鮮で、今まで聞いたこともないような「天父の神様」と出会ったときは、とても驚いたと話されています。その驚きと恵みを、お父さんや家族にも伝えたかったのでしょう。次に、フィリップス・アカデミーのあった、当時のアンドーバーの風景を日本と比較しながら伝えています。アメリカ大陸の東海岸の北の地域なので、日本と同じように紅葉があつたりして、四季がはっきりしつつも、冬の寒さは江戸や群馬の安中とは比べものにならないくらい寒いところです。冬は池が凍るほどでスケートもできるようでした。当時すでにアメリカでは外出時の服装、手袋、靴もとても便利で、室内も暖かく保たれていました。当時も今も、春は4月下旬ころに来ると書かれているので、ちょうど北海道の気候と似ているのかもしれませんが。チャタムのテラー船長宅に行った時の様子を伝えながら、馬車や蒸気（機関）車を利用していることも話しています。父・民治にとっては、とても信じられなかったことと思います。当時のアンドーバーは、学校（どんなに貧しい子どもでも行ける小学校、フィリップス・アカデミー、アボット・アカデミー[女学校]、アンドーバー神学校を含む）だけでなく、貧しい人々の施設、病院などもありました。孤児院、病院も、もともとイギリスの教会との関わりで生まれた経緯もありますが、当時のアメリカのニューイングランド地方では、クリスチャンの人たちが、イエス・キリストの教えを生活の中に生かそうとして歩んでいた気風が、かなり充満していた時期でした。アンドーバーも、1646年にピューリタンのタウンとして開かれ、その伝統を守ってきました。「**これら(貧しい人々の施設・病院)**

は、村人がお金を出し、葉や衣服、食物を求める貧しい人々を養うためです。ああ、ここにこそ仁政[思いやりのある政治]が中国や日本より進んでいることがわかります。」と新島先生がコメントしています。

さらに、生活風土として、農夫が牛を放牧し、チーズ、バターなどを作っていることも伝えていますが、日本ではまだなかったものだったと思います。麦や野菜、果物をつくっている様子は、日本と同じですね。食事の様子も紹介されていて、お箸でなくナイフとフォーク、洋食の内容、食後のカステラ、プリン、パイなどが出されていました。飲み物として、茶、コーヒー、チョコレート、ココアなど飲まれていることも知ると、今の私たちの生活とほとんど同じですね。新島先生はお父さんに対して、アメリカは医療が進んでいると伝えた上で、やわらかくて偏らないものを食べることに、保養のための外出もアドバイスしています。



新島先生が旅日記に描いた馬車

今述べてきたようなピューリタンの気風が充満していた街にある、フィリップス・アカデミーでの学生の様子も、その影響を受けていて次のように伝えていきます。

「学生は、正直でいつわりもなく、酒や煙草を一切飲まず、・・『天上独一真神』の道を身につけ、この世を償ってくださる聖人イエスの教えを守り、日夜怠ることなく祈り、その恩恵や力添えを望みます。彼らは自己抑制をし、父母に孝行をつし、自分自身を愛するのと同じように兄弟姉妹、朋友隣人を愛し、偽りやおもねり、口先だけのことを言うのを恥じ、悪口や怒声を嫌うので、その風俗の美しさは酒色にふけて品行の修まらない日本の若者たちにぜひとも見せたく思います。・・・私も昔の七五三太とは大いに違って、この聖人の道で心が深く満ち足りております。また日夜怠らず聖書を読み、聖人の道によって安らぎ、善を行っています。」「私はますます遜(へり)くだり、ますます勉強して学問が成就することだけを心に決めています。」ちょうど新島先生が在籍していた時期（1865年10月編入学、67年6月修了）のテイラー校長先生（1837年～71年校長在任）は、特にピューリタン精神にのっとりた学校運営を行ってきたと言われていたので、この手紙の内容も納得がいきます。

最後に「日夜怠ることなく、叔祖父様や父上のために未来の幸福を祈り」つつ、脱国して家族に迷惑をかけた放蕩息子としての行動を詫びながら「千里を駆け巡る志」を持ったことを理解してもらうことを願い、手紙の締めくくりとして、父・民治には「天上独一真神」のことを伝えようとしています。

「どんな人でも悔い改めた上でその神を信仰し、日夜敬い、神に祈って、『神よ、家族全員に恵みを与え、悪事や災難を防ぎ、そして日々の食物をお与えください。そのうえ以前に犯した罪をお許しください。』などと唱えれば、この神は喜んでその祈りをお聞きになり、必ず未来の幸福をお与えくださいます。さてこの神のことは帰国の後においおいと詳しく申し上げたく存じます。」

実際、この手紙のとおりアメリカから日本への帰国後、新島先生が父・民治と再会するのは、

この手紙を書いたから7年半後（1874年11月）のことでした。

そして、新島先生との再会を果たした数日のうちに、新島先生から神様の愛と主イエス・キリストの救いを直接伝え、父・民治をはじめ家族がイエス・キリストを救い主として受け入れ、「天上唯一真神」の神様を信じて歩むようになりました。その後、数週間の滞在のうちに、安中だけではなく、周辺の町を含め、信じられないくらいの方々が新島先生のお話を聞いて、クリスチャンになられたと報告されています。やはり、手紙だけでなくリアルなやり取りの方が、今も昔も伝わるものが大きいようです。今の時期なので、特にそう感じます。（「現代語で読む新島襄」119ページ） ***英文手紙にチャレンジ***

父の日にちなんで、新島先生のお父さん・民治への手紙から、父なる神様のことを考えてみました。「父の日」を覚えて、わたしたち自身も、お父さん、おじいさんに感謝するとともに、クリスチャン詩人の八木重吉さんがつくった「みんなもよびな」の詩の中でも語られているように、いつでも、誰でも、親しみをこめて祈ることのできる神様の存在を知って、実際に神様への「小さな祈り」を皆さんも行ってみて、この1週間も歩んでいきましょう。

みんなもよびな 八木重吉

さて あかんぼは

なぜ あん あん あん あん なくのだろうか

ほんとに うるせいよ

あん あん あん あん

あん あん あん あん

うるさか ないよ うるさか ないよ

よんでいるんだよ

かみさまをよんでるんだよ

みんなもよびな あんなに しつっこくよびな



「あなたがたが子であることは、神が「アバ父よ」と叫ぶ御子の霊を、わたしたちの心に送ってくださる事実からわかります。」（新約聖書 ガラテヤ信徒への手紙4章6節）

December 22, 1874

I have informed you of my safe arrival in Yokohama, where I stopped only one night and half a day, going to Tokyo on the 27th. I left Tokyo on the same afternoon for home, where I arrived on the midnight of the 28th. I traveled in a jinrikisha (cart drawn by men) twenty hours without taking a least rest except for meals. I hired three men for the purpose, one for myself and two for my baggage. They ate five times in twenty hours, spending nearly an hour for each meal. They ran sixty miles within fifteen hours, four miles for an hour. It was my intention to remain in Yokohama for three days when I arrived there; but when I once stepped on the dry land, my dear native soil, I could not wait even for three days. Hence I hurried toward home without stopping in Yedo. When I came here it was midnight of the 28th (November) therefore I disliked to disturb my parents' sleep, and slept in an inn. In the morning I sent word to my father. Then I came home and was welcomed by my aged parents, sisters, neighbors, and all acquaintances. My father was ill for three days, and could not move himself on account of rheumatism; but when he heard of my safe arrival, he rose up and welcomed me with fatherly tenderness. When I hailed him, he stooped down without a word. I noticed his tears dropping on the floor. My acquaintances gathered at home and requested me to tell them all my experiences in the United States. Since I came here, the callers come not simply from this town, but also from the neighboring towns and villages, lying within seven or eight miles from here. They have kept me busy all the time. They come here on hearing of my humble name, and hoping to see me even for a few minutes. They look as sheep without a shepherd. I find it almost impossible to send them back without giving them some spiritual food.

Soon after my arrival at home, I presented your kind letter to my father, but for a long time I could not translate it for him, because when I tried to read it, I could not help thinking of the scene of my last departure from you, and the very thought prevented me from speaking freely. Another day I gathered my parents and sisters, and

succeeded in reading your letter to them. Before I got half through, all of them began to weep, being much affected by your parental kindness shown to me. My father told me that you were our saviours and gods. Then I told him that he must not make his American friends gods. If he feel grateful for their kind deeds, he must worship that God, the only one God, the Creator of the Universe, the Saviour of Mankind, the God of his American friends. I mentioned still further, that these friends became so good and kind even to a wandering stranger, because they are the true worshipers of true God, and the humble followers of Christ, who is indeed the Saviour of mankind. He came to this sinful world to save the poor and lost. These friends saved me from a miserable condition, and gave me necessary education, so that I might become a teacher of the glad tidings of Salvation to our benighted people. They loved our people, as much as their own American people; and gave me good education hoping that I might render some service to our people, especially in leading them to the way of life.

1. Much of this letter appears in L&L; this fuller version was copied in pencil in a sure hand and rests in DA.

新島先生が書いた

英文手紙に

チャレンジしよう！

<英文手紙 challenge>

帰国後、家族に再会し、
群馬県のできごとなど
報告をふくめて、
ハーディー夫妻に宛てて
書いた手紙です。
生徒の皆さんも
読んでみましょう！

Since that time my father discontinued to worship the Japanese gods and his ancestors. By his consent, I took down all the paper, wooden, earthen and brass gods from shelves where they were kept, and burned them up. I send a few paper gods for you, which my mother threw over in the fire-place. There are no gods or images in this house now. I trust they will be the worshipers of the true God hereafter.

I am so thankful that my life and their lives have been spared these past ten years, and we are permitted to meet once more before we depart from this world. I hope you will pray for me, so that I may ever keep myself nearer and closer to my Saviour, and make an entire consecration for his cause.

Beside my home friends, my humble labor within three weeks in this place has been wonderfully blessed. I have preached several times in the school-house in this town, and also preached to a large audiences in different families. A week before the last Sabbath, I preached to a large audience in a Buddhist temple. You will doubtless be surprised at my success when I give you its account. On the 2d inst. I took a trip to a town where iron mines were recently discovered with eight of my acquaintances. We stopped in an inn near the place and on the following morning we awoke very early and began to talk some nonsense. Then I began to preach without

any forms. There was one miserable drunkard among them. During my discourse he listened to me very attentively and kept himself perfectly quiet. Since that time he began to reform himself entirely. He called on me another day and told me that since he stopped drinking he can arise early in the morning and work better than ever before. I have heard of another case of reform, and quite a number of others are seriously thinking of it. All the priests in this community came and listened to the preaching of the new religion. There were over two hundred in number present, consisting of priests, laymen, a few women and children.

At my preaching in the school-house a week ago to-day, there were the whole body of the magistrates of Takasaki, a neighboring city of 15,000 inhabitants. They came here in order to hear me preach, because it was a Japanese holiday, and they could leave the city without any trouble. Soon after I got through my preaching in that temple, one of the audience went home and took down all the gods and images from the shrine, and has discontinued to worship them ever since. Day before yesterday, I was invited by a selectman in the next village, to spend the night with him. After the supper, he gathered the whole family to a parlor, and requested me to tell them about Jesus Christ. I began to talk at 8 o'clock and continued till half past ten o'clock that night.

Thirty men in this town, and a few men from out of the town, took up a collection for purchasing some Christian books for themselves. One of them gave six en (nearly six dollars in gold), and a few others gave one en. The contributions are over thirty, and the amount of contributions is nearly \$17.35 in gold. They requested me to buy some Christian books, when I go to Tokyo or Yokohama. They are hungry and thirsty for the Christian truth. I wrote Rev. D. C. Greene a week ago for permission to remain here still longer, but he persuaded me to go to Osaka next Sabbath. I find here everything ready for the Gospel. The field is white for the harvest. As Mr. Greene requested me to come soon, I am intending to leave this place for Tokyo, to-morrow or next day. If I continued to labor here two or three months I have no doubt that most of the above will become followers of Christ. It is very painful to leave this hungry flock, without giving them more spiritual food. This community is entirely free from any bad foreign influences. This may be a more desirable place for me to establish a Christian

society than Kobe or Osaka. I would rather prefer to remain and labor in this unspotted community (I mean unspotted from any bad foreign influences), on a new foundation so favorably opened before me.

The enclosed paper gods are saved from the fire place, where my mother burnt up all sorts of gods, kept in the family since the time of my remote ancestors.